

書誌とリアリティの追究について

鳥木圭太

浦西和彦氏の業績を振り返るとき、やはり見逃せないのはその全体に占めるプロレタリア文学研究の比重の大きさであろう。特に葉山嘉樹研究に関しては第一人者として、その研究成果は現在の葉山嘉樹研究の基底を成すものとなっている。今、『著述と書誌 第一巻 新・日本プロレタリア文学の研究』（和泉書院 一〇〇九年、以下『著述と書誌』一巻と略記）を繙くと、その第Ⅱ部に葉山嘉樹に関する論考が置かれ、第Ⅰ部には作品研究を中心としたプロレタリア文学に関する論文が収録されているが、その多くが文戦派の作家、作品であることに気づく。

目次から第Ⅰ部に取り上げられている作家を列挙すると、前田河広一郎、江口渙、黒島伝治、岩藤雪夫、徳永直、山本勝治、伊藤永之介、里村欣三、本庄睦男、宮本百合子の一〇名であり、文戦派を脱退し作家同盟に移つた黒島を含めると一〇名中六名が文戦派の作家ということになる。

このことは「文戦派の作家たちを本格的な研究対象として取

り上げることが極めて少なかつた」「戦後のプロレタリア文学研究⁽¹⁾に対する浦西氏の批判的姿勢の表れでもあるが、同時に、文戦派の文化運動の実践の中に、ナップ派とは異なる文脈で文化運動と政治運動の結節点を見出していたと思われる氏の問題意識の一端をうかがうことができる。この問題意識は、一昨年丸善雄松堂から刊行された『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集⁽²⁾』に収録された浦西氏のコレクションにも如実に反映されている。その収集対象はナップ・文戦派を問わず、地方組織において配布されたガリ版刷りのビラや報告書、同人誌、演劇関係資料にまで及んでおり、氏の関心がプロレタリア文学運動にとどまらず、社会・文化運動全般にまで向けていたことは一目瞭然である。

また伊藤永之介や岩藤雪夫、山本勝治、貴司山治といった、戦後のプロレタリア文学研究の主流からは外れたマイナーな作家たちに光をあてたのも浦西氏の大きな功績の一つといえるだ

ろう。氏の研究は、戦後のプロレタリア文学研究において、その沃野の広大さと多様性を開示し、後進の研究に先鞭をつけたのである。

こうした浦西氏のプロレタリア文化運動への興味関心が、氏の業績のなかにどのような形で結実しているのか。『著述と書誌』第一巻に収録された各論考を中心に、プロレタリア文学研究における浦西氏の業績を振り返って考えてみたい。

浦西氏の業績について再検討する際、必ず言及されるのはその書誌的分野における膨大な業績についてである。しかし、一言で言うならば浦西氏にとつての書誌研究とは、目的ではなく手段であつたのではないか。前田角藏氏は浦西氏の研究集のタイトルが『著述と書誌』であることに言及し、

本書のネーミングにおいて、「著述と書誌」というようにに、どうして氏が「著述」にこだわったのかと言えば、そこには、浦西「『書誌』という世間の評価への氏なりの強い異議申し立てが含まれているよう思う。それは「書誌」抜きのテクスト論、あるいは「読み」の理論、パフォーマンスへの批判でもあつた。⁽³⁾

と的確に指摘している。こうした浦西氏の問題意識は、次の引用部に述べられている主張からも明らかである。

文学作品の理解の前提として、先ず作品の書誌的事実をきちんとする必要があろう。書誌的調査が文学的研究とは別個のところに位置するのではない。文学的研究というものは書誌的なところからはじめねばならない。私にとつて書誌的興味は文学研究そのものについての関心である。⁽⁴⁾

この言葉を裏付けるように、氏の論考はその字数の多くが先行研究における書誌的事項の誤りを正すのに費やされていることに気づく。それは作家の生年や、細かな誤字・脱字の指摘にまで及ぶ。

しかし考えてみれば、文学表象とは現実の反映であるという前提に立つ限り、そのコンテクストの背後にある現実を事実を基にして批評するということは、文学研究にとどまらず他者と話題を共有し議論する際の基本的な姿勢であろう。とはいえて、氏の各論考は、そうした大前提が文学研究において如何に等閑にされてきたか、現にされているかを提示し、文学研究に携わる者に威儀を正させずにはおかない。

そして、この浦西氏の主張をふまえて『著述と書誌』所収の各論に臨む際にうかがえるのは、あくまでも個々の作品の読みを深めるために、書誌事項から歴史的事実を丹念に掘り起こし、それを文学的なリアリティの問題として論じるという姿勢である。

例えば「岩藤雪夫「鉄」と「賃銀奴隸宣言」」⁽⁵⁾では、岩藤雪夫「鉄」に描かれたストライキが、「政治闘争への方向転換」という視点から描く「努力を殊更に回避している」ことを「作品の弱さ」『著述と書誌』一巻 五七頁として指摘し、続く「賃銀奴隸宣言」についての分析では、題材となつた日本蓄音機争議の歴史的過程を労働運動資料から丹念に掘り起し、その記述の「虚構」性を指摘していく。いずれの作業も、単に作品の「史的不正確さ」(同前 六一頁)を暴くこと 자체を目的とするではなく、あくまで作品に描かれた「文学的リアリティ」(同前)の強度を測るための作業として行われていることに注目したい。

また「徳永直『太陽のない街』と共同印刷争議」⁽⁶⁾では、徳永直『太陽のない街』で描かれた大同印刷争議のモデルとなつた共同印刷争議の事実関係をテクストと照らし合わせ、作者の中で事実と虚構が混同していることや、作中の出来事の設定年月の現実とのずれを指摘しつつ、徳永の創作姿勢が「争議を立体的に把握し、その社会的・経済的・政治的なつながりといった全体的展望でもつて描く」『著述と書誌』一巻 八六頁)ことにより、「ルポルタージュ的発想からは解放された」(同前 八七頁)と分析している。こうした作業もまた、浦西氏にとって作品の「文学的虚構」(同前 九三頁)の強度を担保する「リアリティ」(同前)の問題にかかわるものとして認識されている。

このリアリティを基軸とした作品分析は、プロレタリア文学内の一ジャンルとして捉えられがちであつた農民文学を読み解く際にもいかんなく發揮される。

「山本勝治と「十姉妹」」(前出)では、

「十姉妹」は、まつとうな農民精神とは反対の投機的对象として十姉妹の飼養に手を出さなければならぬところの窮屈した農村の現実を、祖父と孫の対立、祖父と父との対照的な性格といった登場人物の形象化のたしかさにおいて捉えられ、古い地方農村の家庭の特徴的な性格をリアルにうかびあがらせているところに農民小説として傑出しているのである。

『著述と書誌』一巻 一二四頁)

と、その「目的意識によって構成された」「プロレタリア小説の図式的な構図」(同前)ではなく、その「形象化のたしかさ」によって作品を評価している。

また、「伊藤永之介「梟」について」⁽⁷⁾では、伊藤永之介研究における書誌学的な誤りを訂正しつつ、伊藤永之介「梟」の題材となつた新聞記事などの一次資料を丹念に掘り起し、いわゆる「鳥類物」と呼ばれる伊藤の農民小説を同時代における「東北農民の現実」『著述と書誌』一巻 一四六頁)を反映したものであり、その描写手法について現実にあつた事件やモデルをそのまま作品の中に形象するのではなく、いつたん作者の意識内で蒸留することで「芸術的形象として描きあげ」(同前 一四七

貢）でいると評価している。また、作品の改稿過程において「一人の特定の主人公に密着せずに、獨得の説話体で、貧農民の群像を自在に」⁽⁸⁾取りあつかう描写手法が確立され、「農民生活が時局的に空間的にもつとも集約され凝結された場面に於いて、それらの農民の社会生活と人間性」（鳥類物以後）を描くといふ、鳥類物の特徴である「集約的なリアリズム」（鶯）のリアリズムの手法を認識していった」と分析している。

以上のような浦西氏の分析の特徴は、書誌的な方法論を基軸として作品の発表当時の言説空間を再構成し、その位相において作品とそのコンテキストを形成する現実との関わりの中から作品の特質を析出するというものである。そして何よりも重要なのは、こうした分析手法が、作品の持つリアリティの強度を測定することを基底に置いているということである。

ところで、こうした氏の書誌的な問題意識が、プロレタリア文学作品を分析対象とした際に、その作品 자체がもつリアリズムに対する関心とリンクするのは、ある意味では当然のことと言えるだろう。なぜならプロレタリア文学運動は何よりもまずリアリティを問題として展開した文学運動だからだ。

作家に対し「プロレタリアートの階級的主観」を獲得しそれによつて作品を写実的に描くことを作家に要請する藏原惟人「プロレタリア・リアリズムへの道」（『戦旗』一九二八年五月）をはじめとして、リアリズムと組織論を結びつけて展開した唯

物弁証的創作方法の提唱、一九二八年から三一年ごろにかけてナップ陣営で交わされた芸術大衆化論争、あるいは運動崩壊後のプロレタリア作家たちの創作のよりどころとなつた社会主義リアリズム論など、プロレタリア文学運動の陣営で交わされた創作に関する議論はみなリアリズムの追究をその主軸に据えていた。

そしてこれらはリアリズムにかかる議論であると同時に、あるべきプロレタリア文学とプロレタリア作家像を規定し、圧的に作家身体に作用していくことになる。プロレタリア作家たちはナップ・文戦派を問わず、こうしたイデオロギー的に駆動するリアリズム理論に、接近と離反を繰り返しながら作品を編み上げていった。プロレタリア文学はリアリズムという規範意識のなかで生成した文学であったのだ。

浦西氏の問題意識は、プロレタリア文学をこうした同時代の言説空間の中に再配置し、作家身体を囲繞する現実のイデオロギー的影響の中で作品を読み解かなければ、作品の眞の意味での読解とはならないという認識に支えられている。氏にとつて書誌研究は、当時の言説空間を再構成するための必要条件であるが、しかしそれは決して十分条件ではありえないのだ。なぜなら、単に書誌的な事項をたどるのみでは、そこに生起する人間の感情やイデオロギーの様態を読み解くことはできないからだ。

以上、浦西氏の業績から氏の書誌的な興味関心とリアリティ

の追究に向けられた氏の研究姿勢を検討してきたが、こうした氏の姿勢を参照することは、インターネットの普及で氾濫する情報の中から事実を追求するために膨大なデマゴギー——現在ではフェイクニュースやポストトゥルースという呼び方のほうが耳馴染みがよいが——と対決することを余儀なくされた我々にとつても、今なお大きな意義があるのでないだろうか。

感情を通過した現実認識——リアリティによって描きなおすこと、そうした作業を経ることなくして、眞の意味での「ファクト」に到達することなどできない。浦西氏の仕事は、改めてそのことを我々に教えてくれるのだ。

注

(1) 「山本勝治と「十姉妹」」(初出は関西大学『国文学』第五四号一九七七年一二月)、引用は『著述と書誌』一卷一一一頁

(2) 昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会編 丸善雄松堂(2) 一〇一七年一〇月

(3) 「書評 浦西和彦著述と書誌(第1巻) 新・日本プロレタリア文學の研究

学の研究

《第2巻》現代文学研究の基底

《第3巻》年譜葉山嘉樹伝

《第4巻》増補 日本プロレタリア

文學書目

『日本近代文学』第八一集 二〇〇九年一一月

(4) 「書誌について」(初出は日本近代書誌学会『会報』第六号、一九九九年一月、引用は『著述と書誌』第二卷 現代文学研究の基底) 和泉書院二〇〇九年五二二五頁

(5) 初出 関西大学『国文学』第五〇号、一九七四年六月
(6) 初出 『民主文学』第三八九号、一九七八年三月
と手繰り寄せ、そこに生起する(今・ここ)に生きる我々の

二〇一八年三月に『サイエンス』誌上に発表された研究によれば、SNSにおける虚偽のニュースの拡散速度およびその範囲は、事実のニュースのそれをはるかに上回っていることが統計的に確認された。¹⁰⁾ 虚偽の情報(フェイクニュース)が事実(ファクト)に対し、なぜあれほど広範囲に、かつ驚くべきスピードで拡散していくのか。この疑問に対し、先の研究では虚偽の情報は事実に対し目新しさとネガティブさで勝つており、人々はこうした情報を拡散しやすい傾向にあるのではないか、という推論を提示している。

つまり、虚偽の情報は、現実に対し「そうあってほしい」と欲する人々の意識を通過することで、ある種のイデオロギーとして通俗性を獲得していくことなのではないだろうか。もちろん、事実の提示には、虚偽の拡散の何倍もの時間と労力が必要になるという物理的な制約もあるだろう。だとすれば、こうした虚偽のイデオロギーには、事実(ファクト)の提示だけでは対抗することはできない。問題の所在を、事実をもとに手繰り寄せ、そこに生起する(今・ここ)に生きる我々の

(8) 「伊藤永之介の「梟」と同人誌「小説」細田」(初出は『日本文学』第三十一巻六号、一九八一年六月、引用は『著述と書誌』一卷一五三一頁)

(9) 同前 一五七頁

(10) Soroush Vosoughi, Deb Roy, Sinan Aral “The spread of true and false news online” Science 09 Mar 2018: Vol. 359, Issue 6380, pp.1146-1151